

# ロシアにおける ニタリノフの

# 便座について

椎名誠



---

ロシアにおけるニタリノフの便座<sup>べんざ</sup>について

---

新潮文庫

し - 25 - 4



平成二年五月十五日 印刷  
平成二年五月二十五日 発行

著者 椎<sup>い</sup>名<sup>な</sup> 誠<sup>まこと</sup>

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式會社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(〇三)二六六一五一一  
編集部(〇三)二六六一五四四〇

振替東京四一八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付  
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

---

印刷・二光印刷株式会社 製本・憲專堂製本株式会社

© Makoto Shiina 1987 Printed in Japan

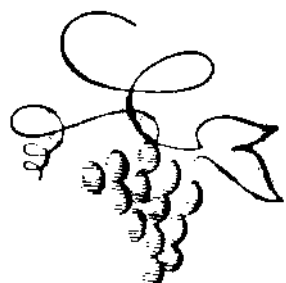
---

ISBN4-10-144804-3 C0195

新 潮 文 庫

ロシアにおける  
ニタリノフの便座について

椎 名 誠 著



---

新 潮 社 版

4478



## 目次

|                     |     |
|---------------------|-----|
| ロシアにおけるニタリノフの便座について | 九   |
| 万年筆いのち              | 三五  |
| はじめての川下り            | 五九  |
| 自動車たいへん記            | 九五  |
| ストロングな波             | 一二五 |
| 梅雨のかたまりをとびこえる話      | 一三七 |
| まつりはいいなあ            | 一五二 |
| あとがき                | 二四二 |

シナメンスキーの便座は木のワッパである

妹尾河童



ロシアにおけるニタリノフの便座について



ロシアにおけるニタリノフの便座について



極寒のロシアを二カ月にわたって横断した。TBSが開局三十周年を記念して制作する「シベリア大紀行」というドキュメンタリー番組のレポーター役を引き受けたからだ。

極寒のシベリアは北半球で一番寒く、私たちがめざしているオイミヤコンという地区は北半球最極寒地点となっていた。すなわちそこは北極よりも寒いのである。過去に記録された最低気温はマイナス七十一度。

私たちは十一人のチームだった。長い旅なので退屈しのぎにいつの間にかメンバーのそれぞれに即席のロシア名がつけられた。私はとにかくラーメンが好きなのですぐシイナという名前に引っかけてシナメンスキーというロシア名をいただいた。安易ながら大変納得すべき名前だった。ところがそのシナメンスキーはロシアに行く六日前までクソ暑いニューギニアのトロブリアンド諸島にいたので、わずか十日ぐらいの間にプラスからマイナスへ温度差百度近くを移行することになった。そのような場合人間の体は果してどんな反応をするのだろうか、それは自分でも非常に興味のあるところだった。すると面白おもしろいことがわかった。私は毎日ねむってばかりいたのである。十分ほどの飛行機待ちのうすら寒い空港のベンチでイネムリ、ホテルのフロントで手続きのあいだにイネムリ、食事の合い間にイネムリ（ロシアのレストランは超スローモーターで前菜からデザートまで二〜三時間かかる）といった具合で、と

にかく体をじつとさせると睡ねむってしまふのだ。ニューギニアから帰ってきてロシアに出發するまで馬鹿ばかばかりしいほどあわただしかったので、かなり睡眠不足だったということもあるのだろうが、私はもしかすると百度近くの温度差をしのぐために個人的な冬眠態勢に入ってしまったのではないかと秘ひそかに考えたりしていた。

間もなくロシアにおける私の名前はアキレ・サンドル・シナメンスキー・ネルネンコというまことに立派なものになった。私はこの新たなロシア名を大いに納得して受け容いれざるを得なかった。

私と世界中の旅に出ているカメラマンの山本皓一やまもとこういちさんは、仕事熱心のあまり単独でロシアの町や村の奥ふかくまで入りこんでしまい、KGBの民間組織員のような人に何度も逮捕されそうになったりして私たち一行のバス出發時間にいつも遅れてきた。そこで彼はオクレンコという、これもまた実に納得すべきロシア名を頂戴ちやうだいすることになった。

TBS技術クルーのチーフに新田隆にったたかしさんというまことに面倒見のいい人がいた。この人は街なかでも食卓でもいつも基本的にニコニコしているので、はじめはニコリノフという名前を貰もらったが苗字みょうじのニッタとかけあわされて、間もなくニタリノフという感動すべき名前になった。ニタリノフという名前になると、新田さんは街なかでも食卓でもニコニコというよりもニタニタと笑っているように見えた。かくして私たちのクルーの中でこのニタリノフ氏のロシア名がもつとも気軽にあちこちで呼びかわされるようになった。

ニタリノフは技術のヒトだから、街で出会う大ざっぱでいいかげんで中途半端なロシアの電気管理技術というものが要するに見ちゃあおれなかった。寒い空港待合室にドデンと放り投げてある旧式な電気ストーブのニクロム線が切れていて半分しかつかない、というのを見るとふところからドライバーを出してたちまちのうちにそれをつないでしまった。あちこちに置いてあるテレビはブラウン管の調整がいいかげんで色のバランスがめちゃくちゃだった。俳優の顔がナスビ型に歪んでみえたりした。するとニタリノフは再びドライバーをとりだしてあつという間にきれいに直してしまふのである。

ホテルの漏れる水道の栓とかひび割れのひどいバスタブなどもたちまちのうちに修理してしまった。ニタリノフの行くところロシアはどんどんきれいになっていった。

シベリア第二の都市、ヤクーツクのホテルに泊ったときのことだ。おかしなことにこのホテルのトイレには便座がなかった。はじめは仲間のそれぞれが自分のところだけ便座がないのだろうと思っていたらしくあまり便座の話題は出なかったのだが、ある人がひょいと便座の話をしてたとき、そこで漸くみんなの部屋に便座がない、ということがわかった。

「どうやってしているのだ？」ということになった。トイレットペーパーを便器の縁に敷いてやっている、というシオラシイ者もいれば、スリッパを下に敷いてやる、という人もいた。かまわずじかに尻をのせてやっているよ、という者もいたが、ためしにその人の部屋のトイレを見せてもらったら便器そのものがけっこう綺麗だった。私の部屋もそうだったがロシア

のホテルの便所および便器というのは相当に迫力に満ちて汚ないのである。

私たちのクルーはヒマラヤに登ったり砂漠を横断したりアマゾンをうろついたりとかかなりワイルドな旅をしている連中ばかりだったので、せいぜい日本ふうの「並の汚なさ」だったらかまわずやってしまうはずだった。しかしたまに、シャワーの出るホテルに入った時ぐらいあついシャワーをあびてパンツを取りかえて、やはりきちんと便座つきの便所でコトをすませたい、という気持ちになっていたのもたしかであった。

しかしそれにしてもどうして軒なみ各部屋のトイレに便座だけがないのだろうか、ということが話題になった。あまりきれいさっぱりに便座がないので、もしかするとこのヤクーツクという土地では便座というものをもともと使わない習慣なのかもしれない、などという人もいたが、よく見ると便器の先端（というか後端というか）にはちゃんと便座を取りつけるための金具の残骸があった。

「ロシアになぜか便座だけを狙う大盗賊団でもいるのではないか」などと言う人もいたが、その意見はあまり相手にされなかった。

資本主義の国だったならそのホテルの経営者が何故か訳もなく大の便座嫌い（嫌いで、経営方針として）「当ホテルのトイレでは便座は一切使っておりません。理由はとくにありませんがね。むひひひ」などと言ったりすることもあるかもしれないと思っただが、ここはなにしろ前後左右天地上下いたるところが共産主義の国である。一個人の趣味や嗜好が通用するところで

はないのだ。

考えられるのは壊れても修理したり補充したりしない、ということだった。そうして便座のないのを見た客が怒って隣の部屋からもぎ取ってしまう、などということが続いているうちにとうとうこんなふうに使座だけがなくなってしまうた———ということはありうるような気がした。

しかしいずれにしてもこの便座騒動は退屈なシベリアの夜をすごす我々に恰好の話題を提供してくれた。なにしろ外は十秒で眼の周囲が凍ってしまう零下五十度の世界である。おまけに昼前の十一時頃ようやく夜が明けて午後二時にはヨタヨタと半熟タマゴのような太陽がツンドラのむこうに落ちてしまうので夜がやたらに長かった。

私はそこで生の馬肉に冷たいウオトカですっかり陶然となりながら、このシベリアにやってくる直前までいたトロブリアンド諸島のキタバという島がいかにかに陽光あふれて海の色空の色あくまでも蒼くたおやかに美しかったか———という話をした。

その島は喉が渴けばいたるところに生えているココ椰子の実をのめばいいし、大小便をしなくなればいたるところでやってよかった。しかもこの島では便座など一切不要なのである。

私がやつかいになっていた村は、男は禪女は腰蓑という感動すべきトラディショナルスタイルで身を固めていた。村には犬、鶏、山羊、猪豚などがはなし飼いにされていた。はなし飼いされたこれらの動物たちはお互いに自分の生活領域を守るだけでたいした争いはせず、

人間たちもビンロウジュという木の実タバコのようなものをくちやくちやさせて口の中を真赤にしているだけで、電気もなく新聞もなくチリガミコーカンもないこののどかな島の生活はなかなか楽しいものだった。

問題があるとすればひとつだけだった。朝起きて朝食がすみ、裏のヤブに行つて用を足してくるのだが、この時トイレットペーパーを小脇こわきに抱えていく姿を猪豚どもに見られてしまうとまずいことになった。縞瓜しまうりのような形をした子供からもうすっかり小形イノシシというような面がまえをしたやつまでが十数匹、なんとも嬉うれしそうな顔をして「びゃあびゃあびゃあ」と鳴きながら一列になつて私のあとについてくるのだ。野グソなどというものは本来ひとりでひそかにやるものであるのにこれではまるでハーメルンの笛吹きみたいなのだ。「だめだめ来ちゃだめ！」と言つても言葉は通じないから猪豚どもはさらに嬉うれしそうな顔をしてぞろぞろとついてくる。

私は猪豚が半円状に並んでいる真ん中にしゃがみ、なんとも落着かない公開野グソというものをしながら、たしか同じような状態の話の前に聞いたことがあるぞ！ と思つた。それは一年前に南半球最南端の町プンタアレナスというところで連日クソ談議をしていたときのことだった。ブエノスアイレスからアルゼンチンの海岸をずっと南下してきた男が、ペンギンに囲まれてしまつてたいへん困つた、という話をしたのだ。

この男もやはり野グソをしていた。するとペンギンたちがあつという間にまわりに集まつ

てきてすっかり円形状になり、押すな押すなという状況になってしまった。男は戸惑いながら、しかししつかりと目的を果たした。男はキャンプをしながら南下していたので、間もなく自分のテントに戻った。

翌朝男はペンギンたちのやかましい鳴き声で眼をさました。男がテントから出てみるとまた沢山のペンギンたちが男のテントの回りを囲んでおり、その中の一羽がピンクの紙をマフラーのように首の回りにまきつけていた。男はきのう自分のクソの上にいつもより沢山のトレットペーパーをかぶせてきたのだが、ペンギンが首にまいているピンクの紙はまさしくそのときのトレットペーパーである、ということを知った。

「それを見たときなんだか申しわけないような気になっちゃってねえ……」

と、男はプンタアレナスの小さなホテルのレストランでそのペンギンの首にまきついたトレットペーパーの具合を自分のマフラーで真似してみせた。

なんとなく何時もより沢山のトレットペーパーを使った、という男の気持はニューギニアの島で私にもよくわかった。

「ぼくは蠅にとりつかれたことがある」とシベリアのホテルでニタリノフが言った。

ニタリノフの話はサハラ砂漠だった。乾燥したサハラ砂漠の野グソはまずシャベルをかくことから始まります、と言った。